

診察室から 片頭痛の新しい薬

院長 福田 雄高

緊張型頭痛が、非薬物的療法が重要な一方で、片頭痛は薬剤治療が治療の大きな柱になります。片頭痛といっても、不定期で時々しか起きないという方から、頻度も多く、痛みも強く、仕事に集中できない、仕事を休んでしまう、家族や友人との時間を犠牲にしている、次に来る発作が不安になるなどの方も多くおられます。

これまで片頭痛に対してのお薬というと、トリプタン製剤という、痛みの早期に内服し、過度な血管拡張を抑えたり、また塩酸ロメリジン（ミグシス）という、脳の血管が収縮するのを抑えたりする予防薬が薬剤治療の中心でした。最近、痛み物質自体を抑えようとする抗CGRP（カルシトニン遺伝子ペプチド）抗体という、新しいタイプの薬剤が発売され、有効性が示されています。

片頭痛は、何らかの刺激により、三叉神経と呼ばれる神経からCGRPなどの神経伝達物質が出され、脳内の血管などに作用することにより起こるといわれています。抗CGRP抗体は、CGRPと結合し、その働きを抑えることで、片頭痛発作を起こさないようにすると考えられています。

現在国内では3つのメーカーから発売されており、基本的には月に1回皮下に注射を行います。片頭痛が過去3か月の間で、平均して1か月に4日以上、これまでの片頭痛予防薬の効果が不十分、または内服の継続が困難な場合などが適応になります。投与によって、片頭痛日数が減る、急性期治療薬を使う日数が減るといった効果が期待できます。当院でも効果は上々であり、内服薬が減った方も多く認められています。

これまでトリプタン製剤や、その他のお薬内服もなかなか頭痛のコントロールが難しかった方、一度気軽にお問い合わせください。

